

アンドニス・サマラキスの『きず』に見られる「笑い」 —二つの「笑いの装置」—

佐藤 りえこ

1. はじめに —なぜ「笑い」を考えるのか？

アンドニス・サマラキスの小説『きず』を一言で言い表すならば、「ページをめくる度に、笑い声が聞こえてくるような錯覚を起す作品」と言えるかもしれません。この笑い声というのは、作品に登場する人物の滑稽な言動や筋の展開の飛躍さなど、作者が読み手の感覚を刺激するために作品の中に仕組んだ「笑いの装置」によって引き起こされる読者の笑い＝「テキスト外の笑い」と、登場人物の動作の一つとしての笑い＝「テキスト内の笑い」の両方を指しています。

『きず』と「笑い」を考えるようになったのは、おそらく、読書会でこの作品を初めて読んだ時に耳にした「テキスト外の笑い」がきっかけになっているのではないかと思います。学生が作品を日本語に訳している間、それを聞きながら、笑いを堪え、時には堪えきれずに噴き出してしまったある先生の姿が、忘れられないでいたからです。その時分は、まだ現代ギリシア語の初級文法を終えたばかりで、作品のどこがそんなに面白いのか、もう少し厳密に言うと、「テキスト外の笑い」を引き起こすために作家サマラキスが仕掛けた「笑いの装置」が何であるかを考える余裕などありませんでした。しかし、その後、「何が可笑しいのか」を考えながら、何回か一人で読み直していくうちに、作品の随所に、読み手を刺激して笑わせる「笑いの装置」があるのを発見し、。読書会で聞いた「テキスト外の笑い」の原因が分かったように思いました。同時に、サマラキスが、ナンセンス、即ち「笑いの装置」を作品に盛り込むことで、何を描こうとしたのかという一つの疑問が浮かび上がりました。この疑問を読者の側から言うならば、わたしたち読み手は、「笑いの装置」に感応して笑うことで、作品をどのように読み説くことができるだろうかと言い換えられるでしょう。

更に『きず』の中には、読み手の笑いを誘発する、テキストの外部に向けて作家が仕掛けた「笑いの装置」とは別に、作品に登場する人物の笑いによって、何かを描こうとした作家の意図、つまりもう一つの「笑いの装置」が隠されていることに気がきました。登場人物たちが笑うシーンを見ていくと、作品の展開上、笑いが生じる場面が重要であることが多いことから、登場人物が笑うという動作（＝「テキスト内の笑い」）によって、自然に、あるいは意図的に、外面に表われる登場人物の心理的な変化をたどることができるのではないかと考えられます。

そこで、以下に、サマラキスが読者に提供する笑いの誘因となる滑稽さを取り出し、作家が「テキスト外の笑い」を引き出すために、なぜ「笑いの装置」を作品に仕掛けたのか、その意図を考えてみようと思います。また、登場人物が笑う場面を取り出し、その場面における登場人物の心理的な変化をたどることで、作品の展開に「テキスト内の笑い」がどのような役割を担っているか、すなわちテキスト内における「笑い」の働きを推察してみましょう。

なお、テキストはエレフセルダキスから出版されている『きず』の33版を使用しました。作品の引用には、小池滋訳『きず』（東京創元社、1987年）を使用することにします。また、引用の中の強調は佐藤によるものです。

2. 作品『きず』のあらすじ

「笑い」について考える前に、作品『きず』のあらすじと作者サマラキスの略歴、作品の時代的な背景などを簡単に紹介しておきましょう。まず、『きず』日本語版の作品紹介を見てみましょう。

p.1 《カフェ・スポーツ》の奥まった席でブランデーを飲みながら、これからのデートに思いを馳せていた一人の男。ところが、彼のテーブルに特高警察の者だという男が近づいてくると、うむを言わず、彼を地方支部へと連行した。さらに翌朝、尋問官とマネージャーによって、警固され、首都に移送される羽目になった。そして、もちろん、このとき彼は気づきもしなかったのだが、この移送計画には特高警察が案出した恐るべき実験が組み込まれていたのだ。．．．！現代ギリシャ文壇の鬼才がミステリアスに描く警察国家の悪夢。

ここで触れられている移送計画と恐るべき実験、それに警察国家の悪夢を中心に、もう少し詳しくあらすじを整理してみましょう。

反政府活動を行う秘密組織の運動員である《カフェ・スポーツ》の男（以下、

「男」)は、その任務を遂行するために、《カフェ・スポーツ》で、面識が全くない相手を待っています。相手の男との接触は成功するものの、メッセージを伝える前に、二人は別々に秘密警察に逮捕されてしまいます。そしてメッセージを受けるはずの相手の男が、秘密警察によって、誤って射殺されたため、「男」の有罪を立証する証拠は、本人の自白以外、何もなくなってしまいました。これを「男」が知らないということを利用して、秘密警察は、「男」の自白を促すために、ある実験的な試みを行うことにします。まず、相手の男がまだ生きていると偽り、彼と「男」の証言を突き合わせるために、「男」を首都にある本部に移送するのだと「男」に信じ込ませます。そして、首都へ移送する途中、移送用の車が突然、故障し、修理が終わるまで、尋問官とマネージャー、「男」は、ある街に滞在を余儀なくされます。しかし、これら(すなわち、移送計画)は、全て「完全無欠な計画」を実行に移すための偽装だったのです。そして、秘密警察の英知を集めて練られた「完全無欠な計画」(すなわち、恐るべき実験)が実行へと移されます。その計画とは、本部での取り調べが延期されたことで緊張から解かれた「男」が、尋問官の好感のもてる態度に心を開き、積極的に自白をするか、あるいは一度、弛緩してしまった気持ちが、本部での厳しい取り調べにより急に引き締められ、その急激な心理的な変化から自白をするか、それとも逃走を企てることで有罪を証明するか、という「男」が置かれた状況の変化に対して、「男」が心理的にどのような反応を示したとしても、その結果は全て「男」の有罪を立証することになるよう計算されているのです。尋問官は「男」の気持ちを和ませるために、いわゆる「感情」をもった人間のふりをして、芝居を演じます。しかし、次第にこの芝居は本物となり、計画は意外な方向へ展開します(すなわち、**国家警察の悪夢**)。そして、最後のクライマックスで、尋問官は、特高警察内部に広がっていた「全体主義」によって黙殺されていた人間性を取り戻します。

次に、作品をより理解するために、作家サマラキスの生年から『きず』が発表された頃までの略歴と、『きず』が書かれた時代背景にも少し触れておきたいと思います。

サマラキスは、1919年、アテネに生まれます。生家はプラティア・ヴァシス(ヴァシ広場)に近い下町にあります。サマラキスの『自伝』には、幼年期に下町の小さな路地で見聞きしたことが、いかに印象深いことであったかが記されています。後に作家の目が、社会の下層階級に向けられるのも、幼年期の体験が下敷きになっていたからでしょう。小学校の高学年の頃から詩作を始め、児

童を対象とした文学雑誌に投稿を始めます。病弱だったので学校を休むことが多く、家で父親が持ち帰る様々な印刷物から知識を吸収しました。ギムナシオ（中等教育機関）を卒業と同時に、家庭の経済事情から進学を断念し、事務や雑用などのアルバイトをして、家計を助けてました。1935年、労働省が、経済省から分かれて独立した省として新しく設置されることを新聞広告で知り、労働省に入ります。そして、かねてから関心があった失業や賃金格差などの労働問題や、1923年にギリシャとトルコの間で行われた強制的な住民の交換により、小アジア（トルコの西海岸地方）からギリシャに流入した移民や難民に関する問題を担当します。

時代は前後しますが、ギリシャでは、1925年、パンガロス將軍によって、無血クーデターが起り、その翌年、パンガロスが大統領となり、独裁政治が始まります。サマラキスが労働省に入った翌年から、イオアニス・メタクサスの独裁政治が始まり、省内にもイタリアやドイツのファシズムを思わせるような全体主義の空気が広まります。サマラキスは、1940年、メタクサスの独裁政治に追随する労働省の内部にある全体主義に反発し、辞職します。失業と同時に、かねてからの念願であったアテネ大学への進学を果たし、ここで法学を学びます。ギムナシオ時代から、共産主義の思想に傾倒し、学生運動にも参加していましたが、1942年から、EAMの活動に加わり、何度も当局に逮捕されるという経験をします。ドイツ軍の占領下の1944年には、ナチに対するレジスタンス運動に加わったため、囚われますが、後に「奇蹟的」に脱出することができました。

ギリシャがドイツ軍の占領から解放された1945年に、再び労働省に入ります。国連の国際労働機構の難民救済運動にも携わり、ヨーロッパ・アメリカ・南米・アフリカの各地へ使節として赴きました。

50年代に入った頃から詩よりも小説を創作するようになり、1954年に短編小説集『求む、希望』*Ζητείται ελπίς* を発表します。以後、長編小説『危険信号』*Σήμα κινδύνου* (1959年)、短編小説集『私は拒絶する』*Αρνούμαι* (1961年) を次々に発表し、作家としての地歩を固めていきました。そして第四作目に当たるのが、わたしたちがこれから読んでいく長編小説『きず』*Το λάθος* (1965年) です。

1967年、軍将校がクーデターにより政権を掌握します。1971年、パパドプロスの軍事独裁政治に対して、サマラキスを含むギリシャの文学者たちが、ヨーロッパに向けて、声明を発表します。その後、1973年に、アテネ工科大学で学

生と警察が衝突し、これが原因で、独裁者パパドプロスが失脚します。そして翌1974年に、軍政が廃止されます。

サマラキスの半生と時代の流れを見ると、作家が絶えず目を社会に向け、人間の自由と尊厳を脅かすあらゆる勢力に、運動を通して、また作品を通して、抵抗したことが分かります。サマラキスの『自伝』には、メタクサスの独裁政治や第二次世界大戦中のドイツ軍によるギリシャ占領、パパドプロスの軍事独裁政治といった時代に、サマラキスが学生として、一公務員として、そして作家として、時代をどう捉えたか、また、人間の尊厳を無視し自由を束縛する暴力にどのように抵抗したかが記されています。こうした記述は、処女作『求む、希望』から『きず』までの一連の作品を読む時、重要な手がかりになります。『きず』には、特高警察の内部事情や取り調べの方法、政府に抵抗する運動家の活動などが描かれていますが、サマラキス自身の「運動家」としての実体験が、これらの描写に臨場感を与えているのではないのでしょうか。また、1967年に起った軍部のクーデターに先立ち、国内に広がっていた社会的な不安も作品の背景になっていると考えられるでしょう。

3. 作品『きず』に見られる「笑い」

ここで、問題を『きず』の中の「笑い」に戻しましょう。「全体主義の恐怖」と「人間性の回復」という作品の主題と、読者の笑い(=「テキスト外の笑い」)を引き起こすための滑稽さ(=「笑いの装置」)との間には、関連性があるのでしょうか(3.1.)。また重要な場面に描かれている登場人物の笑い(=「テキスト内の笑い」)には、場面の展開の上で、どのような役割があるのでしょうか(3.2.)。この二点について、以下で考えてみようと思います。

3.1. 「テキスト外の笑い」を誘発する滑稽さ

サマラキスの『きず』は、カフカやグレーム・グリーン の作風と多くの類似点があると指摘されてきました。中でも、登場人物や背景が特定化されるのを避けるために、人物名や地名などの固有名詞を使っていません。固有名詞を与える特定のイメージや先入観をできるだけ払拭し、読み手にとって、作品が「特定の場所で特定の時代に起った一事件」に終わらないようにするための作者の配慮だと考えられます。

同時にサマラキスは、作品の展開上、あまり重要とは思われないような状況を、滑稽さや時にグロテスクさをもって、詳細に描写しています。無名の人物

や地名に具体的なイメージを与えるためだと考えられています。これは、特高警察や秘密組織といった読者にとって非日常的な作品の設定を、読者が身近なものに感じられるようにするための手段であると言えるでしょう。こうした情景描写の中にちりばめられている滑稽さやナンセンス、ユーモアは、ベケットの『ゴドーを待ちながら』と共通するという指摘があります。ギリシャの大衆喜劇映画や政治風刺の笑劇にも通じるものがあると思われます。

このような読者の「笑い」を誘発する「笑いの装置」には、作家サマラキスのどのような意図が隠されているのでしょうか。以下に、この「笑いの装置」を取り出して分析してみましょう。

a. 特高警察を戯画化する「笑いの装置」

p.65・・・この主任の演説—それは六月のある午後、六月十一日の午後のことだ—おれは昼めし時にさくらんぼを一キロまるまる喰ったのでおそろしく腹がいたんでいたが、演説を聞いて感激のあまり、おれは腹痛すらも忘れ、感激が腹痛でさめるようなこともなかった。一度なんか本当に涙で目が曇った時があった。そこでおれは、特高警察での執務用にとその朝買ったばかりの、黒眼鏡をとり出した。おれが黒眼鏡をかけている限りは、主任に涙を見られないですむだろう。

* おれ=尋問官

これは特高警察の尋問官が、研修生から正規の尋問官に昇進した時のことを回想するシーンです。この場面には、次の二点を「笑いの装置」として取り出すことができるでしょう。

・昇進する者を代表して宣誓する大事な就任式の日に、さくらんぼを食べすぎて、ひどい腹痛に見舞われてしまうという尋問官の不用心で間が抜けた行為。

・執務のために購入したはずの黒眼鏡が、泣き顔をカモフラージュするために、予期せず、役に立ったという点。

この場面の直前に、「特高警察には「政府側か、政府側でないか」という人間を二分する絶対的な哲学がある」という主任の言葉が出てきます。この特高警察の「哲学」が、激しい腹痛（つまり人間の肉体的痛み）を忘れさせ、人の心を酔わせるような危険なものであるということ、わたしたちは読み取ることができるでしょう。更に、主任は、「人間のいわゆる感情は、特高警察には必要ないものだ。警察にとって、何も考えず、自分の胸のうちに問うことなどし

ない人間が価値あるのだ」と述べています。このため、尋問官は、感激の涙を主任に見られないよう、黒眼鏡で隠してしまいます。この黒眼鏡は、涙を隠すために、尋問官がかけたのですが、黒眼鏡をかけるという行為は、「感情を無にせよ」という警察の命令に従った行為とも考えられます。

主任の演説内容と尋問官の行いを対比してみると、なぜ尋問官の行為が滑稽に受け取られるのかが分かるのではないのでしょうか。言い換えれば、なぜこの場面に「笑いの装置」があるのか、サマラキスが、この場面に「笑いの装置」を仕掛けた意図を読み取ることができるのではないのでしょうか。すなわち、尋問官は、主任の言葉＝警察の哲学に「感わされ」て、痛みを忘れ、感情を殺すという行為をしますが、この尋問官の行為を、サマラキスが滑稽に描き出すことで、読み手はそれを笑うことになると考えられます。そして、読み手が「尋問官を笑う＝警察の哲学を笑う」ことで、特高警察の「絶対的な哲学」が戯画化されると言えるでしょう。

別の場面を見てみましょう。反政府運動をしたという容疑をかけられている「男」は、《カフェ・スポーツ》で接触する相手を待つ間、待ち合わせの目印として、紙に落書きをするように指示されていました。この指示に従って、自分の彼女の胸を思い浮かべながら、紙に大きさの異なる二つの歪んだ楕円と点を書きます。「男」が逮捕されたとき、この落書きを取りに戻っていいものかどうかを考えるシーンが次の引用です。

p.158-9 彼は引き返してあの絵を取りに行っていないか、と刑事に頼もうかと思ったが、すぐにやめた。彼女を危険に巻き込むにしのびない。刑事があのだと書きかき、あの二つの小さな円は何か反政府的な脅威をあらわすものだと思うかもしれない。(中略) もしあれが彼女の乳房だなんて言おうものなら、警察の連中はそれを見せる、検査させる、さわらせる、測らせる、その乳房が絵に描かれた通り、少々ひしゃげて、左の方が右より大きいかどうか調べさせる、と言うだろう。

*彼＝「男」

警察側(主任)はこの落書きを次のように解釈しています。

p.52-53 「君たちにも見えている、そしてわしにも見える二つの小さな円は、結局二つの小さな円だけの話かもしれん。つまり、隠れた意味があるわけでもなく、どのような陰謀にも関係ないのかもしれない。ただのいたずら書きかもしれん。(中略) しかし他方では、その反対のことも考えに入れておくべきだろう。すなわち、この図が現在のところまだわれわれにわかっていな

い、何か特別な意味を持っている、ということもだ。」

主任の言葉から、些細な事象にも裏があるのではないかと疑う慎重さは、警察の目の厳しさを読み手に確認させます。実際、「男」を主任が取り調べた時、この「理論的にはまったく無害な円が、実は反政府活動に使うための、武器の隠し場所をあらわす図かもしれない」（p.57）と、「男」に詰問しています。

p.158-9からの引用には、取り調べで、もし「男」が思慮を欠いた発言をしようものなら、警察の捜査が無関係な第三者にも及んでしまうという危険性も暗示されています。次の引用は、警察の捜査は徹底的で容赦がないということを明示しています。

p.46・・・特高警察官の基本心得第一条は、特高警察の外部の情報については、すべて探究し、あらゆる危険を冒しても発見すべし。

しかし、「男」の落書きが何であるかを知っているわたしたち読み手には、警察の慎重な読みは、的外れに見えるだけでしょう。また、徹底した捜査のやり方も、調査官の下品な行為（p.158-9の強調部分）と受け取られ、読み手の失笑を買う結果になります。こうしたズレを読み手が笑うことで、警察の調査が持つイメージが、すっかり変えられてしまうという「笑いの装置」の効果を読み取ることができるのではないのでしょうか。

b. 「完全無欠な計画」を戯画化する「笑いの装置」

先の2.で触れた特高警察の計画について、まず、主任が尋問官とマネージャーに計画を説明する場面を見てみましょう。

p.139・・・「その計画というのは、本部でじきじき考え出したものだ。（中略）われわれが扱おうとしているこの計画は、考え出された時から実に卓抜で、完全無欠な点では天下無類だということだ。完全無欠な計画。まさに完全無欠な計画なのだ。そうだ、そう呼ぶのがもっとも正確かつ適切だ。」

主任が誇らしげに計画を語る言葉の中に、「完全無欠」という語が繰り返し使われます。

「完全無欠な計画」を成功させ、「男」の心を開くために、尋問官は自然な演技と自然な雰囲気での演出を行わなければなりません。このため、尋問官は、自分と全く異なる人物をイメージし、それを演じます。

p.242・・・（「男」を移送する途中）国道四十号線との交差点で渋滞した時、おれが車から飛び出して行って、野の花を摘んで来た時のことはどうかという

と、おれがダッシュボードに花を活けた時に、あの男がいそいそと手伝ってくれた。そこでおれは小さなふじ色の花を彼のボタンホールにさしてやった。他の時だったら、ほかの誰かがやっているのを見ただけでむかむかしてしまつたらうし、まして自分でやろうなんて絶対思いもしないようなことを、考え出してぬけぬけとやった。つまり計画の一環として、芝居を演じたのだ。

*おれ=尋問官

しかし、実際の尋問官の演技や演出の多くは、自然どころか突飛で、その不自然さが読者の笑いを誘います。また、演技は「オーバーであってはいけない」し、「妙なこと、不自然なことはやるな」という主任の厳重な注意を守ろうとすればするほど、実際の行動には、不自然さが目だってきます。尋問官の行動に描かれる「笑いの装置」は、あまりにも多いため、紙幅の関係から、その「演技」が佳境に入る「街中の散歩」のシーンを、ここに取り出してみましよう。偽装の自動車の故障によって足止めを余儀なくされた街を、尋問官は「男」と「愉快に」散歩をします。途中で知り合った女の子と海水浴場にまで出かけます。海岸では、拳銃を携帯していることを「男」に気付かれては困るので、尋問官は、背広を着たまま、焼けた砂浜に腰掛け、女の子たちが水から上がるのを待っています。しかし、二人は、暑さに我慢ならなくなつてとうとう水に入ります。

p.193 とうとうおれたちも海に入ってしまった。(中略)

まったくおれたちの格好ときたら、おかしなものだったろう。四方八方から笑われたり口笛を吹かれたりしたのだから。だけど、何をかまうものか！おれたちは結構楽しかったし、誰に頼まれてやったわけでもないのだから！上着を着、ネクタイをしめたまま海に入って、ばちゃばちゃやりたかっただけの話なんだ。

*おれ=尋問官

p.194 まったく滑稽な眺めだった。二人の娘がほとんど裸同然で砂の上に横になって、うつ伏せになったり、仰向けになったり、横を向いたりしている——一方二人の男がそのそばに、ワイシャツを着ネクタイをしめてすわっているのだから。

しかし、状況はますます滑稽になっていきます。女の子が「男」に、トイレに行くからついてくるように、頼みます。「男」を一人で行かせるわけには行かないので、尋問官も一緒に「同行」します。

p.195 間もなく《カフェ・スポーツ》の男とおれは、トイレの前に立って、娘を待っていた。おまけにおれは、おれの連れの娘のハンドバックまで持たされていた一ものすごく大きな藁で編んだ、オレンジ色のやつだ。ひどく派手なオレンジ色の。

尋問官が、計画を遂行するべく人間味のある雰囲気を作り出そうとすればするほど、読み手の目には滑稽な行為に写ります。この尋問官の滑稽な姿は、特高警察の姿と重複していると読むことができるのではないのでしょうか。ここでも、「テキスト外の笑い」によって、警察を戯画化するという構図を見ることができます。

上で整理した a. と b. から、サマラキスは、特高警察に象徴される全体主義の愚かさを「笑いの装置」によって具体化し、その「笑いの装置」を読者が笑うことで、全体主義が内包する暴力性を散逸させようと意図しているのではないかと考えられると思います。

3. 2. 登場人物の「笑い」（＝「テキスト内の笑い」）

作品には、登場人物が談笑したり、微笑んだりするシーンが多くみられます。こうしたシーンの中には、「完全無欠な計画」を遂行するために、尋問官やマネージャーが演じた「笑い」のシーンも含まれています。演技としての「笑い」は、尋問官が当局側の警官でありながらも、実はごく普通の人間で「男」と変わりが無いのだという安心感を男に与えることに成功しています。そして拘束されている「男」の心理的な緊張を緩和し、「完全無欠な計画」に欠かせない和やかな雰囲気を作り出すという効果を持っていると言えるでしょう。次の引用は、笑いを交えた車内の和やかな雰囲気から、尋問官とマネージャーが特高警察の冷徹な人間ではなく、ごく単純な人間であるかのような印象を「男」が受けたことを示しています。

p.236-237 しかし、おれは二人の手から逃げ出さねばならない！なんとしてもだ！（中略）なんでもいい、チャンスが到来次第、それを利用せねばならない。（中略）護衛を勤めている男はどうやら、ほかでないにせよ、かなり単純な男らしい。そうだ、これこそ重要なことなんだ！自由を求める時に、そしてこれはぜひとも成功せねばならないのだが、このことは大いに役立つだろう！

それからもちろん、たまたまいいあんばいと、護衛がおれに対して親しげな、といってもよい態度を見せていることも、利用せねばならない。この連中ときたらまるで何事もないかのように、遠慮なく口をきいて、なんだかんだといろいろなおしゃべりをしかけて来る。無口で、仏頂面で、近よりにくいタイプの人間でなくて、いいあんばいだった—こちらも悪意のないように見せかけて、連中に疑惑を持たせないようにしよう。

*おれ=「男」

「笑い」は、それを共有する者の間に、一種の連帯感を生み出します。しかし反面、他の人には受け入れられない笑いは、笑った人をその場の人間関係から切り離し、疎外してしまう力も持ち合わせています。次に挙げる二つの引用から、「笑い」が人間の相互関係に作用するこうした相反する二つの力が、尋問官と「男」との間に疑似的な友好関係を作り出すのに生かされているのがわかります。

p.68-69・・・その時マネージャーが急に笑い出した。変じゃないか！何もおかしいことなんかなかったのに。（中略）

「な、おかしくないか？」マネージャーが続けた。「あの《生き魚よりもっと新鮮》というやつがさ。どうしてかわからんが、おれはあれを見ると、おかしくてたまらないんだ。」そう言ってからその証明のつもりか、またもや笑い出した。

「そう、なかなか奇抜な文句ですね」《カフェ・スポーツ》の男が言った。「でも、それほどおかしくないと思いますがね。」

移送車のそばを通りすぎた冷凍車の車体に書かれた宣伝文句を見て、マネージャーが急に笑い出します。しかし、尋問官と「男」は、それが面白いとは思わず、笑いません。ここで、笑いによってマネージャーが残りの二人から疎外されてしまったと言えるでしょう。

p.242 おれとはいえば、それかれおれの計画実行における役割については、おれは、文字通りすべて、おれの理性と直観の双方をすべて投入したのだ。（中略）マネージャーのほうもみごとに調子を合わせてくれて、おれとわざと反対のことを言うてくれた。あとで便利になるように、おれと対照的にふるまってくれたのだ。

しかし、いつもマネージャーだけが「笑い」の共有関係から外れることは、かえって「男」に不自然な印象を与えてしまう危険があります。そこで、次の

尋問官の演技「せせら笑い」は、尋問官が笑いのマイナス効果、すなわち笑うことで人間関係から孤立してしまう「笑いの力」を取って利用し、逆に自分の演技を自然に見せようとしていると考えられます。

p.60-61

「天気予報をしていたところさ。雨が降る模様です！」

「冗談言うない！」おれはせせら笑った。

「おやっ？」彼が言った。「何かおかしいかい？」

おれはげらげら笑った。

「いや、いや。しかしどうして雨なんてこと考えついたんだい？・・・」（中略）

「マネージャーのおっしゃる通りです。」《カフェ・スポーツ》の男が口をはさんだ。

「わたくしにも一言いわせていただければ、わたしの考えじゃこの暑さは少々おかしいくらいです。きっと後で雨になりますよ。」

「じゃあ二対一でおれの負けか」おれは言った。

*おれ=尋問官 彼=マネージャー

計画の最も重要な項目である「街中の散歩」のシーンの中には、尋問官は「男」の心を開き、信頼感を生み出すために、ことさら「笑い」を演じます。

p.149-50

「どこかに腰を下ろして、何か冷たいものでも飲まないか」おれが言った。「はじめの約束の散歩の時間は、まだ十分残っているからな。どうだい？」

「いいですねえ。サンドイッチを食べると咽喉がかわきますからね。そこでわたしがおいしい冷たいオレンジードでもごちそうする、というわけですよ。」

「こいつはうまくやられた！」おれは笑いながら言った。「ありがたくごちそうになるとしよう。だが、おれはオレンジードはごめんだ。アイス・コーヒーにしてくれ」

*おれ=尋問官 わたし=「男」

しかし、こうした人間味のある温かい雰囲気を作り出す演出の中の「笑い」は、演技している尋問官が気付かないうちに、演技から人間の自然な感情の表出としての「笑い」へと変化していきます。この変化は、特高警察が予測できなかったもので、尋問官の変身によって、「完全無欠な計画」は失敗に終わります。すなわち、尋問官は、「計画」実行の過程で自らの演じた「笑い」の力で、本来の人間的な感情を取り戻し、無意識のうちに「男」への同情を感じる

ようになってしまうのです。言い換えれば、特高警察の全体主義思想によって黙殺されてきた人間本来の感情が「笑い」により解放され、人間らしさを取り戻すのです。

次の引用は、「結婚なんて考えていない」という「男」の発言に尋問官が冗談で「応酬」するシーンです。

p.212-3

「まさか、首都から戻ったらすぐに考えるというわけじゃあるまいね」
おれたちは二人とも腹をかかえて笑った。おれたちの笑いが隣のテーブルでレモン・フラッペをストローで飲んでいた女にまで伝染してしまい、彼女までがわけわけもわからずに笑い出してしまった。（中略）
間もなく写真屋がスナップ写真を持って来ると、おれは大笑いした。実におかしな格好をとったものである。おれはまるで乾杯をするみたいにビールのグラスを上げ、ばかみたいな顔をして笑いころげているのだ。

ここに描かれている尋問官の「笑い」は、もはや演技ではなく、自然な感情の爆発としての「笑い」であると言えるでしょう。そして、「男」と尋問官の間には、「笑い」によって、ある種の自然な共感が生じます。もちろん作品の最終部分にある「どんでん返し」までは、当の尋問官はこの「笑い」すらも「巧みな演技」だと信じて疑いません。

p.226 特高警察の尋問官となって七年目だが、こんなことはまったくはじめてのことだ。おれ本来ではない、よその人間のふりをしろ、命じられたのは。

もしおれが鏡をここに持っていたら！小さな手鏡でもいいから、おれが芝居をやっている間、おれのまん前にかざして、おれのいつわりの身振り、おれのいつわりの表情が、計画によって定められたその時その時の段階にしたがって刻一刻と変わって行くのを、自分の目で見るのができたら！

* おれ＝尋問官

「偽りの表情」だと思い込んでいた尋問官の「笑い」は、計画が進んでいくにつれて、「笑い」の質が、演技から自然な感情表現へと変わっていきます。こうした「笑い」の質的な変化を通して、わたしたちは尋問官が人間らしさを回復していく過程を読み取ることができるのではないのでしょうか。

尋問官の「笑い」の質的な変化を浮き立たせるために、サマラキスはマネージャーの「笑い」を対照的に描いています。

p.7

「自然を鑑賞していたのさ

「げっ！」彼が叫んだ。まるでみぞおちをなぐられたか、蜂にさされたか、幽霊か何かを見たか、そんなふうな口調だった。それからおれの方を見てにやっと笑った。ところがその笑い方ときたら！皮肉な、軽蔑を隠したような笑い方だった。

*おれ=尋問官 彼=マネージャー

この「笑い」は、笑う人間が他者に対して優越感を感じ、笑わない人間=笑われた人間に劣等感を与えるという「笑い」の「優越理論」を思い出させます。

更に、マネージャーのこの皮肉な「笑い」は、一般市民を嘲笑する特高警察の姿を暗示していると読み取ることができるのではないのでしょうか。マネージャーの皮肉な「笑い」は、射的場の的である人形の表情—皮肉な笑い (p.206)・皮肉な薄笑い (p.209) —につながる笑いとも解釈できます。そして射的場の人形が口元に浮かべている皮肉な「笑い」を標的とした尋問官の行為は、作品のクライマックスに描かれている尋問官の行動、すなわち「男」の逃亡を阻止しようとするマネージャーにピストルを向けて、「男」を逃がそうとする尋問官の反対体制的裏切り行為の伏線だと解釈することができるでしょう。この意味で、マネージャーの皮肉な「笑い」は、人間性の回復という主題を考える上で重要な役割を担っている笑いであると言えるのです。

p.206

おれがねらいつけて引き金を引くのに、一秒以上はかからなかった。いや、相手のこめかみや心臓を狙ったのではない。口を狙ったのだ。唇が少し下に曲がって、というよりも垂れた、皮肉な笑いを浮かべているようなところを、だ。その笑いを見て、おれはぜひあそこを射ってやろうと決心したのだ。

*おれ=尋問官

これまで見てきた登場人物の笑い、すなわち「テキスト内の笑い」は、次の三点に整理することができるでしょう。

・「笑い」は、尋問官と「男」、マネージャーの三人の、人間関係の中に親密さと疎遠さをもたらす役割を担っていて、「完全無欠な計画」のある段階まで、計画の遂行に効果的に働いていた。

・感情の爆発的な表出という自然な「笑い」は、全体主義によって押し殺されていた人間らしい感情を尋問官が回復するきっかけとなった。

・「嘲笑」は、特高警察の優越感の象徴であり、見ている者に、これに対する反感を与えるという「効果」を持っていた。

この三点から、『きず』に於いて「テキスト内の笑い」は、たんなる表情としての「笑い」ではなく、新たに場面が展開するごとに変化する登場人物の心理を読み手に明示するという役割を担う「笑いの装置」であると言えるのではないのでしょうか。

3.3. 結論にかえて

これまで見てきた『きず』の中の「笑い」は、次のように図式化することができるでしょう。

「テキスト外の笑い」＝読者の笑い

：「笑いの装置」

＝滑稽さ、ナンセンス、ユーモアなど読者の笑いを誘発するもの

：「笑いの装置」の働き

＝「笑い」による全体主義の戯画化

「テキスト内の笑い」＝登場人物の笑い

：「笑い」の役割

＝人間関係を密接にしたり、逆に疎遠にしたりする

＝人間らしさを回復させる

：「笑いの装置」の働き

＝場面の変化と登場人物の内的な変化を明示する働き

参考文献

・笑いに關するもの

- 足立和浩 『笑いのレクチュール』(1986) 青土社
小此木啓吾 『笑い・人みしり・秘密』(1980) 創元社
ジャン・デュヴィニョー著 利光哲夫訳『笑いのたくらみ』(1993) 東海大学出版会
ヘルムート・プレスナー著 滝浦静雄・小池稔・安西和博訳『笑いと泣きの人間学』(1984) 紀伊国屋書店
アンリ・ベルグソン著 林達夫訳『笑い』(1997) 岩波文庫

・サマラキスと作品『きず』に關するもの

- Απόστολος Σαχίνης *Μεσοπολεμικοί και μεταπολεμικοί πεζογράφοι* (1985)
Αλέξ. Κοτζιάς *Μεταπολεμικοί πεζογράφοι* (1987)
Μρία Μιρασγέζη *Νεοελληνική λογοτεχνία* 2τομ, (1982)
Εκπαιδευτική Ελληνική Εγκυκλοπαίδεια τομ.9 (1988)
Μεγάλη Εγκυκλοπαίδεια της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας 12τομ.
日本語訳『きず』(1987年) のあとがき (p.280-281)
サマラキスの自伝 *Αντώνης Σαμαράκης 1919--* (1996)

・時代背景について

- C. M. ウッドハウス『近代ギリシア史』西村六郎訳 (1997年)